
王子

木野子さくら

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

王子

【コード】

N9084B

【作者名】

木野子さくら

【あらすじ】

友人から預かった小学生は、キザな奴でした。

詩人と普通に話したからって、素敵な言葉を聞くことができるとは限らない。無理にひねり出した言葉ほど、醜いものはないと、本当の詩人は知っているからだ。美しい言葉を乱用するのは、ただの格好付け、キレイコトバの人でしかない。

四月の終わり、私はキレイコトバの人と話していた。

彼は風邪をひいたらしい。火照った顔に御手拭を当てている。

「頭クラクラする」

「家に帰りなよ。寝てたほうが良いって、絶対」

クラクラするはずの頭を大きく振って、大仰に溜め息をつく。

「わかってないなあ。僕がここに居るのは、運命なんだよ」

「運命って、何言っちゃってんだか」

私の言う事に耳を貸す様子は微塵もなく、彼は窓の外を見ながら鼻で笑う。何がおかしいのかは分からない。

「第一、誘ってきたのは貴女じゃないか」

彼の言動に、私はいちいち腹の底で笑いを堪えるのに必死だ。なんて似合わないんだろう。まだ十歳にも満たなくせに、その言葉遣いはどこで覚えたのだろうか。

友人がデートに行くだとかいう皮肉とともに、私の家においていた彼女の息子は、見事に彼女にそっくりだった。長いまつ毛、強気そうな鋭い目、薄い唇、そしてこの性格。家でテレビを見ながらお茶を飲む、なんて気まずいのでファミレスにつれてきたものの、「君を相手にしてると、疲れるわ」

「失礼だな」

平坦な声と同じく、表情に変化はない。遠回りでも、直球でも、皮肉や中傷が通じないのだ。そういえば、初めて会ったときの彼女にも苦労したな、と懐かしく感じる。

深爪になっている彼の指先は、手持ち無沙汰に机を叩いていた。

「もつとさ」

「え？」

強い視線が、私を刺す。

「面白い所、知らないの」

抑えたつもり溜め息が、鼻から出た。

時計を見ると、十時をまわったところだった。

「遊園地はいかがですか、王子」

「いいね」

王子はすぐに店を出て行った。私はレジの前で、今日の出費は全額彼女に請求しよう、と考える。

遊園地と言ってもそれほど大きくないが、自宅から一時間と言うのはありがたかった。それ以上かかれば、私は運転をしながら財布と、眉間の皺の両方を心配する必要がある。

トロツコのレールが八の字になって宙に浮いているようなジェットコースターに乗る。スピードはあまりない。隣に座る王子は、恐怖からか、とても静かだった。子供相手に優越感を感じたのもつかの間、彼はジェットコースターを降りた途端、「次はメリーゴーランドだ」と駆け出した。

凜々しい笑みをたたえる奇妙な馬にまたがった、無表情な王子が、三回目の私の前を通り過ぎると、メリーゴーランドは止まった。

降りてきた彼に、「楽しくないの？」と聞くと

「次はあのブランコだ」

と、三六〇度回転している舟に向かって走りだした。

「無視かよっ」

まともに会話が出来なくなるまで、突っ立ってやる、と餓鬼のような意地を張ってみる。気付かないのだから、王子はかなり遠くまで離れていった。ふいに鼻を何かかくすぐり、「ぶえっくしょ」

と、無様なくしゃみが出る。

すると、彼は立ち止まり、振り返った。

「早くしたまえよ」

ゴフツ、という音が出た。口と鼻を同時に噴出すと、笑えなくなるのだと知る。慌ててお気に入りのハンカチで拭いた。少し悲しくなった。

王子はゴンドラの中でも無表情だった。

「楽しい？」

彼はこっくりと頷いた。

「最高だ」

「それは良かった」

母親が引き取りに来る時間は、午後八時。一日中デートのようだ。

「羨ましいこつたな」

現在二時過ぎ。これを降りたら、遅めの昼食にしよう。

面倒な事に巻き込まれた。

王子が、

「昼ご飯なんていらぬ。ソフトクリームを買ってきてくれよ」

と言つてベンチに座り込むもんだから、こんなことになったのだ。私は両手に持ったソフトクリームを、チャラチャラしたカップルにぶつけてしまったのだ。しかも、一人にソフトクリーム一つ、丸ごと全部押し付けた形だ。早足になっていたからとはいえ、これは大変だ。

「つめたあい！」

「あにすんだ、このババア！」

振り返りざまに凄んでくる。あからさまに私の方が悪いので、反論も出来ない。ババアはないだろう、と心の中だけで言う。

「すみません！ 今拭きますんで！」

王子

鞆をあさり、ハンカチを取り出して、ハツとする。これは、汚い。先ほど噴出したときに、唾だとか鼻水だとかを拭き取った布だ。使つのを躊躇っていると、また怒声が飛んだ。

「早くせえよ！ 染みになっちまうだろが！」

「ええー、それ困るうー」

女の甘つたるい声に背筋をぞわりとさせながら、他に何か無いかとまた鞆をあさった。

突然、目の前に黒いハンカチが現れる。

「……王子……」

「ほら、早く拭いておあげよ」

やはり彼の口調が癩に障ったのだらう、男がまた怒鳴った。

「何様だあ、このガキ！」

肩をびくりと振るわせておいて、王子は男をまっすぐ見つめる。

一方で私は女の服を拭いていた。「ありがとー」と応じるころ、男とは正反対の人間のような。少し心が広すぎる、将来が不安な女性である。

「金をせびらなかつたことは褒めてあげよう」

「ごんの……！」

男が腕を振り上げた。が、その腕に女が飛びついた。

「ねーえ。着替えたあい」

「……しょうがねえなあ」

見る見るうちに男の鼻の下が伸びた。

助かった。

去っていくカップルを見送りながら、王子の小さく震える肩に手を置く。

「怖いんなら喧嘩売らないの」

「だって」

王子
「だって、とか言ってしまうところ、子供だな、と思っていると、
続きがあった。」

「だって、姫を守るのが、王子でしょう」「私は思わず目を見開いた。

「あ、貴女がそうやって、王子王子って呼ぶからっ私を見上げる彼の顔は真っ赤になっていた。

口角が上がるのを感じる。

「さすが王子様」

「当然だ」

ぼそつと言うと、彼は駐車場の方へ駆け出した。

「帰る！！」

「え、ちよつと、姫を置いていくのー？」

小さな背中を慌てて追いかけた。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9084b/>

王子

2009年2月19日06時14分発行